



n°165  
2018 December

隔月刊コンフォर्ट イタリヤの心地よさを伝える

# CONFORT

土から始まる

Les Grands Verres パレ・ド・トーキョー リナ・ゴットメ  
食の風景をつくるマチエール 柳原照弘 / OEO Studio  
水野製陶園ラボの挑戦  
タイル・左官で装う住まい 大西麻貴+百田有希 / 福本祐樹 / 和田浩一  
研ぎ出す左官 横山和弘  
丹波篠山 陶芸家たちのギャラリー 久住章 / 平松克啓 / 久住有生  
タイルの潮流を知る

保存版 版築大研究

Plaster and Tiles Originating from the Earth

特集

# 左官とタイル



大きな版築のカウンターが目を引き、第二幕「Back to Earth」、スケルトンにしたときに見えた躯体そのものもつ未完成な美も随所で生かしている。例えば天井は防音のための木毛セメント板を貼ったシンプルな仕上げに。

*Residences with Personal Luxury*

# 五感をつなぐ、素材の力

Les Grands Verres — Palais de Tokyo (Paris, France)

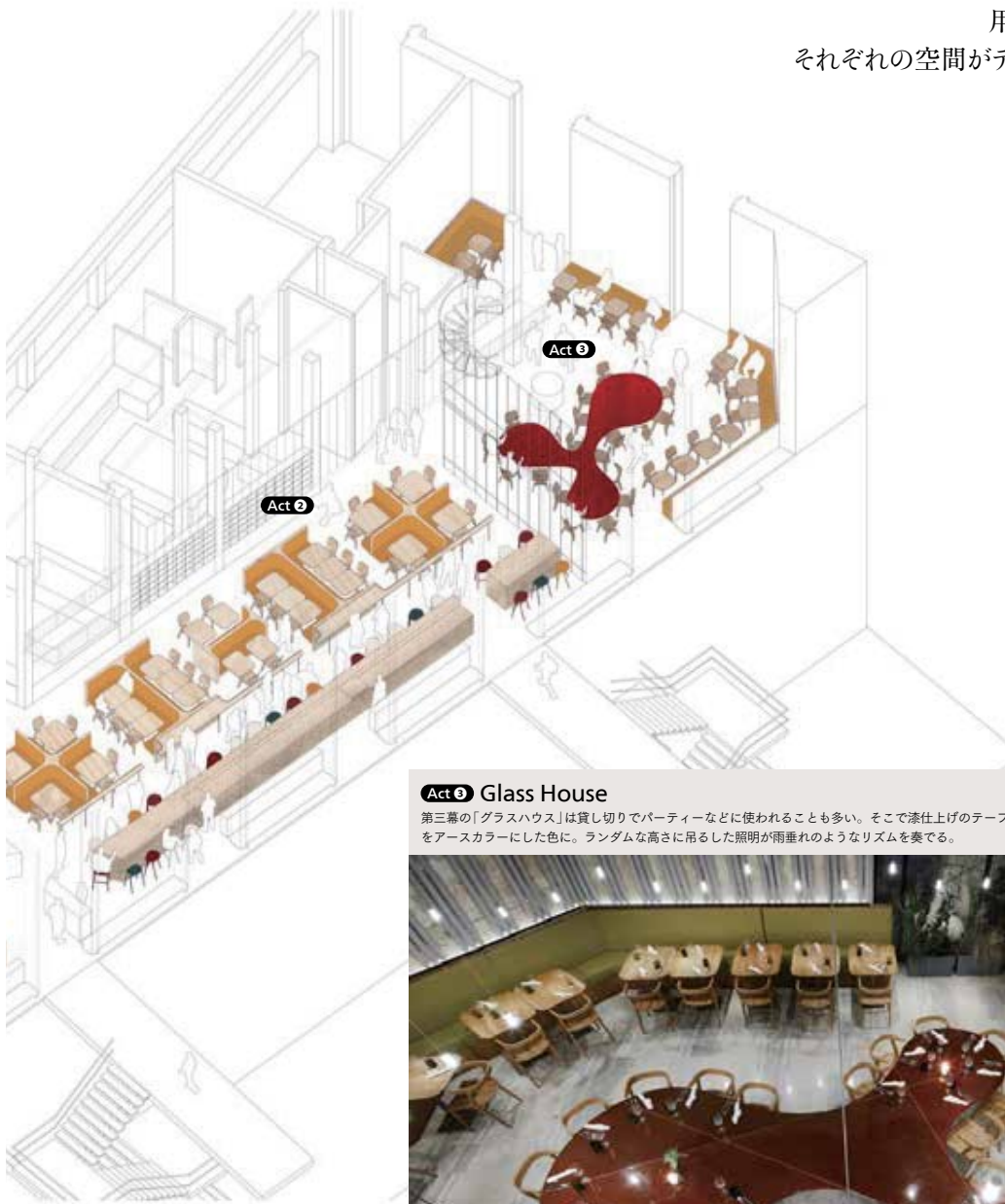
Design Lina Ghotmeh (リナ・ゴットメ)

コンテンポラリーアートの発信地として、セーヌ川の右岸に立つパレ・ド・トーキョー。1937年に建てられた歴史ある建築の1階のレストランが、2017年にリニューアルした。カウンターには、土を積層させた「版築」の手法が用いられている。

取材・文／川上純子 写真／Takuji Shimmura



横に長いレストランは三幕構成の演劇のように、用途に合わせてそれぞれの空間がデザインされた。



**Act 3 Glass House**

第三幕の「グラスハウス」は貸し切りでパーティーなどに使われることも多い。そこで漆仕上げのテーブルの色はハレの色である赤をアースカラーにした色に。ランダムな高さに吊るした照明が雨垂れのようなリズムを奏でる。



**Act 2**

**The Palais' Agora**

第一幕は「パレのアゴラ（広場）」と題した  
 コーヒーハウス・シアター的空間。奥の階  
 段状の席は、ステージになることもある。  
 透け感のあるファブリックが、Act2との  
 さりげない仕切りになっている。



**Act 1** Back to Earth

第二幕は「大地への回帰」。カウンターの後ろの黄土色のまだらな壁は前の内装を剥がして出てきたもの。「アンゼラム・キーファー  
 の作品のように美しく、生かしたかった」とゴットメさん。ブロンズ色の細いミラーガラスを並べ、控えめな反射をアクセントに。





販売カウンターのトップは研ぎ出し仕上げに防水のためのコーティングを施した。土と小石の配合は、マルティン・ラオホさんと入念な打ち合わせをして決めた。



版築の垂直面のところどころに金継ぎのようなディテールを加えている。日本の「侘寂」や故郷のペイルートの遺跡が見せる不完全な美、生のままの美に惹かれるというゴットメさんは、パレ・ド・トーキョーの常設展示となった作品でも、金継ぎをモチーフにしていた。

版築のカウンター、ワインボトルを再利用したガラス  
食材ともつながるサステナブルなアイデア



カウンターの凹部には、荷物をかけるフックと間接照明を設置。両腕を伸ばしてさりげなく受け止める形をモチーフにした木製のチェアやスツールをはじめ、家具もすべてカスタムメイドだ。

## 大都市の中心にあるレストランを 大地に強く結びつける版築のカウンター

パリで最も重要な現代美術の発信地、パレ・ド・トーキョー。2017年の全館改修に伴い、レストランも生まれ変わった。内装を手がけたのは、フランスを拠点に世界各地で活躍する気鋭の建築家、リナ・ゴットメさんだ。マルセル・デュシャンの最後の作品に因み、「レ・グラン・ヴェール」と名付けられたレストランは、地産地消がコンセプトだ。そこでゴットメさんは、大地の恵みを五感で感じる空間を設計した。

足を踏み入れると大地の色の世界が広がる。床面積583平方メートル、天井高5メートル。これほどの大空間は散漫で落ち着かない印象になりかねない。だがそうならないのは、設計に3つの工夫があるからだ。1つめは、全体を3つに緩やかに分節し、三幕構成の劇のように変化をつけたこと。2つめは、版築による大カウンターを空間の主役としてしつらえたこと。3つめは、家具や小物をカスタムデザインし、大地や自然を感じる色や素材で統一したことである。

空間構成から見えていこう。入口に近い第一幕は「パレの広場」。テール席の奥にはジグザグ状の席があるカフェだ。「人びとがふと行み待ち合わせ、集まるための場所。奥の席はステージにもなります。ミュージアムのカフェらしい、ハブニングが起るコーヒーハウス・シアターです」とゴットメさん。

第二幕は「大地への回帰」と題したインフォーマルダイニング。木枠・布張りのコーナー席は、丸みのある形で人を優しく包み込む。そして、何より目を引くのが、長さ18メートルの版築カウンターだ。「これほどの大空間には主役となるマスターピースが絶対に必要でした。レストランが大地の恵みを人に届ける場所であるなら、土のカウンターは自然と人をつなぐ存在になると考えました」と振り返る。

このレストランでは、食材選びがよく耳にする地産地消とサステナビリティを、空間づくりでも目指している。当初は版築の職人を仏国内で探したが、これほどの大作を引き受ける工房がなく、オーストリアの版築作家マルティン・ラオホさんの工房「レーム・トン・エルデ」に依頼した。ゴットメさんのアイデアを聞き、ラオホさんは制作を快諾。ゴットメさんは、家全体が版築作品であるラオホ邸に滞在し、土の芸術や版築について理解を深め、ラオホさんとイメージを共有しながら制作を進めた。

例えば、素材にはセメントを混ぜていない。「土そのものの力や魅力を伝えるため、セメントを混ぜず、土と小石の絶妙な配合を追求しました」とゴットメさん。カウンターは「よい建築は拡張された自然環境に近づく」という彼女の建築思想が、



第三幕「グラスハウス」の壁も前の内装を剥がして出てきた斑な模様をベースに生かしている。中間色のファブリックを使った長い防音部材もカスタムデザインで、機能と意匠を兼ね備えている。

\*ラオホさんの活動は114ページでも紹介。

素材や空間構成に見事に具現化されたインテリアになっている。



カウンター施工中の様子



床の耐荷重やコストの面からカウンターは組み立て式とし、内部を木製の構造にして荷重を抑えた。まずはオーストリアのラオホさんの工場で版築の部材を製作し、パリに輸送した。①②組み立てた段階では継ぎ目が見えているが、職人による現場での入念な仕上げにより、版築の部材の継ぎ目はほとんど見えなくなっている。セメン

トを混ぜず、土と小石だけでつくられているため、継ぎ目をなくす作業は水を使ってなじませるのみ。③内部の木製構造を利用してフックや間接照明を設置。フックやフットレスト部分の版築を保護するプレートには、古びたニュアンスのある真鍮を使用している。④⑤カウンタートップは研ぎ出し仕上げとし、防水性のコーティング

を施した。



**Lina Ghotmeh** リナ・ゴットメ  
1980年レバノン・ベイルート生まれ。ベイルート・アメリカン大学で建築を学ぶ。アトリエ・ジャン・ヌーベルとフォスターアンドパートナーズで働いていた2005年エストニア国立博物館の国際コンペに応募し、最優秀賞を受賞。田根剛、ダン・ドレルとともにDGT. ARCHITECTSをパリに設立する。16年のエストニア国立博物館の竣工を機に、17年DGT.を解散。18年Lina Ghotmeh—Architecture設立。

**Lina Ghotmeh — Architecture**  
75, rue de la Fontaine au Roi, 75011 Paris, France  
contact@linaghotmeh.com  
<https://www.linaghotmeh.com/>

DATA

**Les Grands Verres**

用途 / レストラン

所在地 / 13 Avenue du Président Wilson, 75116 Paris, France

<https://www.palaisdetokyo.com/>

延床面積 / 583㎡

オープン / 2017年

建築設計 / Lina Ghotmeh — Architecture (リナ・ゴットメ)

カウンター制作 / Lehm Ton Erde (マルティン・ラオホ)